

研究課題	運動と豊かにかかわり合いながら、子ども自らが学びとる体育科学学習
副題	～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通して～
キーワード	ICT 個別最適 協働的な学び 学習内容
学校/団体名	熊本市小学校体育研究会
所在地	〒862-0941 熊本県熊本市中央区出水 4-1-1
ホームページ	<a href="https://www.kumamoto-kmm.ed.jp/sch/e/izumiminamies/">https://www.kumamoto-kmm.ed.jp/sch/e/izumiminamies/</a>

### I 研究主題設定の理由

熊本市小体研では、平成30年度から器械運動領域での研究を始め、本年度は8年目となった。その間に現行の学習指導要領の完全実施や新型コロナウイルス感染症による全国一斉休校など子どもたちを取り巻く状況が大きく変化する出来事があった。一方で、子ども一人一人の思いを大切にしながら、自ら運動へ親しむことができる資質・能力を育むこと、また児童自らが課題を見付け、他者と協働しながら解決へ向けて進んでいく学習過程の大切さを改めて感じることができた期間でもあった。体育科の目標には、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成すること」が掲げられている。社会に出て、健康で豊かな向き合い方を阻む様々な課題に対しても自ら考え実践できるようになるためには、体育科の学習でも子どもが運動と主体的・協働的にかかわりながら自ら学びを深めていく必要があると考え、本研究テーマを設定した。

### II 研究主題について

#### 1 「運動と豊かにかかわり合う」とは

- ・運動の機能的特性に触れ、「わかる」「できる」喜びを実感する子どもの姿
- ・自分や友達の動きを見たり、支えたりして進んで運動に関わろうとする姿

#### 2 「子ども自らが学びとる」とは

- ・自らに合った明確な課題をもち、子どもが学習する姿
- ・課題解決に向けて自分に合った方法で試行錯誤し、粘り強く運動に取り組む子どもの姿

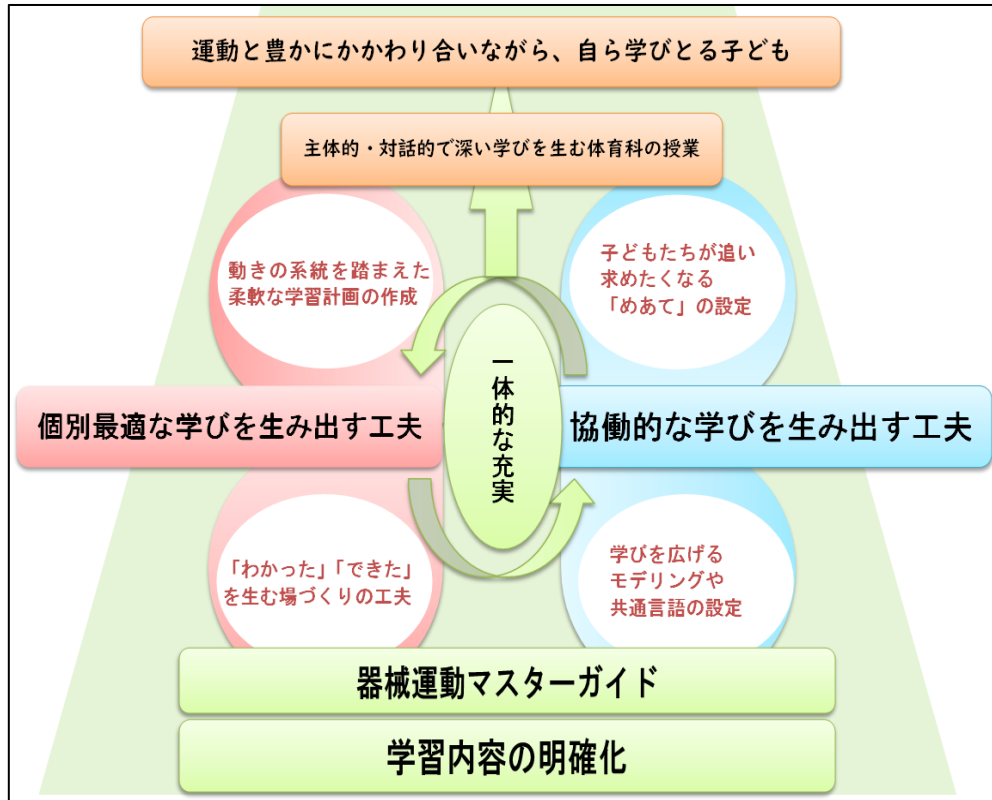
### III 研究の目的

本研究は、器械運動領域において、子どもが運動と主体的・協働的にかかわりながら、自ら学びを深めていく体育科学学習の在り方を探究することを目的とする。近年、学習指導要領において「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められており、体育科においても、子ども一人一人の興味・関心や技能の習熟度に応じた学びの保障と、仲間と課題を解決する過程を通じた学びの深化が重要となっている。そこで、器械運動という技能習得に個人差が生じやすい運動において、子ども自らが課題を見付け、対話しながら学びを深める授業づくりを通して、運動への主体的な関わりと学びの質の向上を図っていく。これにより、体育における学びの意味付けを再構築し、子ども自らが学びとる授業の在り方を明らかにしていきたい。

#### IV 研究の構想（資料1）

##### 1 研究の仮説

体育科の授業の中で「個別最適な学びを生み出す工夫」と「協働的な学びを生み出す工夫」の一体的な充実を行えば、運動と豊かにかかわり合いながら、自ら学びとっていく子どもが育つであろう



【資料1 研究の構想図】

##### 2 研究の視点

###### (1) 「個別最適な学びを生み出す工夫」

- ・動きの系統を踏まえた柔軟な学習計画の作成
- ・「わかった」「できた」を生む場づくりの工夫

###### (2) 「協働的な学びを生み出す工夫」

- ・子どもたちが追い求めたくなる「めあて」の設定
- ・学びを広げるモデリングや共通言語の設定



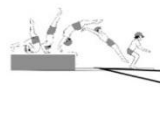
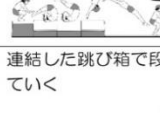
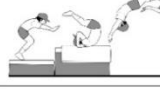
#### V 研究内容

##### 1 研究を支える2つの視点

###### (1) 器械運動マスターガイドの活用

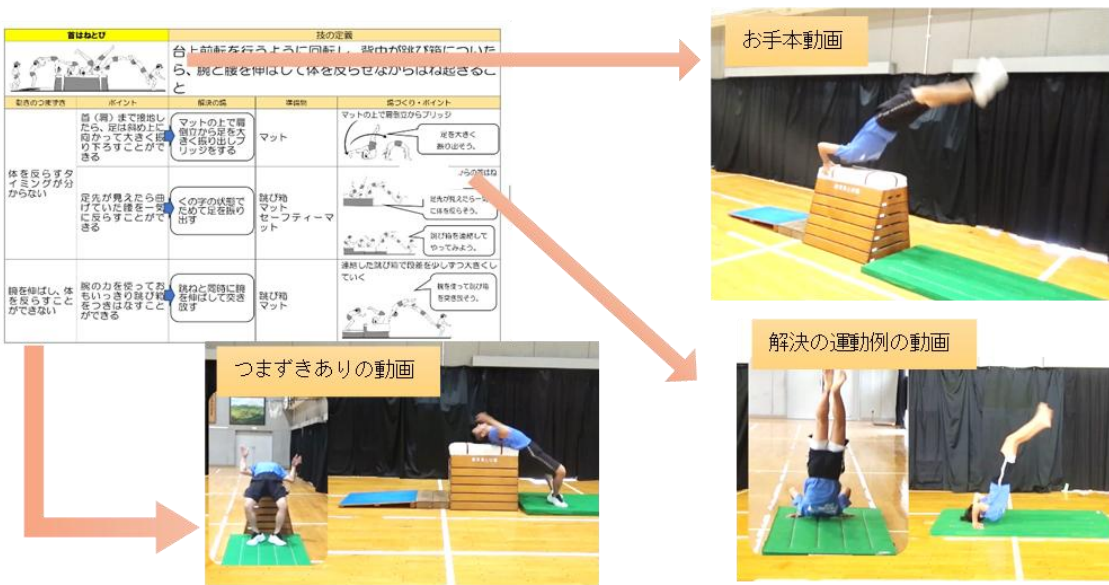
熊本市小体研では、器械運動の全領域で活用することができる「器械運動マスターガイド」（以下、マスターガイド）を作成している。資料には技のつながりを把握するための系統表をはじめ、技のイメージをもつための連続図、予想されるつまずきと解決のためのポイントなどを示している。また、授業の中での具体的な言葉かけの支援や課題

解決に向けた段階的な活動の場についてもイラスト付きで記載しており、教師が単元を計画する際や1時間の授業計画する考える際にも活用することができる（資料2）。

首はねとび		技の定義		
		台上前転を行うように回転し、背中が跳び箱についたら、腕と腰を伸ばして体を反らせながらはね起きること		
動きのつまずき	ポイント	解決の場	準備物	場づくり・ポイント
体を反らすタイミングが分からない	首（肩）まで接地したら、足は斜め上に向かって大きく振り下ろすことができる	マットの上で肩倒立から足を大きく振り出しブリッジをする	マット	 <p>マットの上で肩倒立からブリッジ</p> <p>足を大きく振り出そう。</p>
	足先が見えたら曲げていた腰を一気に反らすことができる	くの字の状態のために足を振り出す	跳び箱 マット セーフティーマット	 <p>ステージの上からの首はね下り</p> <p>足先が見えたら一気に体を反らそう。</p>  <p>跳び箱を連結してやってみよう。</p>
腕を伸ばし、体を反らすことができない	腕の力を使っておもいきり跳び箱をつきはなすことができる	跳ねと同時に腕を伸ばして突き放す	跳び箱 マット	 <p>連結した跳び箱で段差を少しずつ大きくしていく</p> <p>腕を使って跳び箱を突き放そう。</p>

【資料2 マスターガイド（首はね跳びのページ）】


さらに、子ども1人1台のタブレット端末が貸与されていることを生かすために、マスターガイドでは、資料上の連続図をタップすると独自に作成したお手本の動画を視聴することができるようになっている（資料3）。従来の参考資料のようにQRコードを読み込んだり、他のサイトを探し直したりすることなく、タブレット端末上で動きの確認を行うことができるようになっている。従来は、解決の場や運動例は教師が提示することが多かったが、子ども自らがマスターガイドを活用していくことで、学びのハンドルを子ども自身が握った形で学習を進めることができるようになる。



【資料3 児童がすぐ活用できる動画資料】

(2) 学習内容の明確化

学習内容を「子どもたちが身に付けなければならない、または、経験しなければならない『技の核となる動き』」と捉えることで、全ての子どもたちが運動に取り組むことができるようになることを考える。跳び箱運動の「首はね跳び」を例に挙げると、初めに行うのは、首はね跳びという運動の素材を分析していくことである。その中で、「腰角をタメの後に開くこと」という『技の核となる動き』を明らかにする(資料4)。子どもたちが経験しなければならないのは跳び箱の上で「首はね跳び」を行うことだけでなく「腰角をタメの後に開くこと」であるため、重ねたマットの上であったり、ステージ上からであったりしてもこの動きに向かって活動することができる。



**首はねとび**

- ・ 台上前転を行うように回転し、背中が跳び箱についたら腕と腰を伸ばして体を反らせながらはね起きること (学習指導要領 体育編)

L

**学習内容**

『腰角をタメの後開く』

【資料4 学習内容を明確にする例】

2 具体的な取組

上記に示した2つの視点を基にしながら、具体的な4つの取組を器械運動領域の授業づくり・実践に取り入れ、「自らが学びとる」子どもたちの育成を目指す。

(1) 動きの系統を踏まえた柔軟な学習計画の作成

子ども自らが課題を見出し、主体的に学びを深めていくためには、動きの系統性を踏まえながら学習を計画していくことが重要である。限られた時間で子どもたちに動きを身に付けさせたり、経験させたりするために「2カ年で学習する」という捉えのもと、運動の特性や技能の習得状況を踏まえた2カ年の指導計画を作成し、子どもたちが運動を十分に経験し味わうことができるようにする。

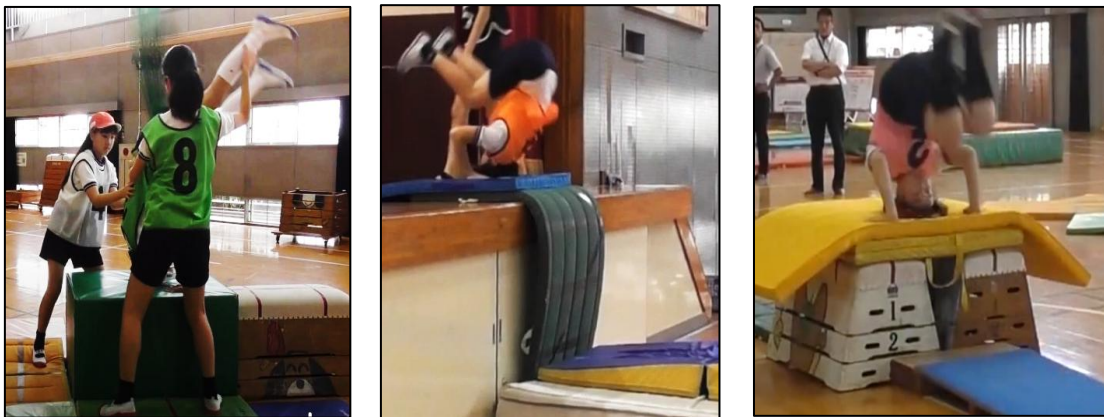
さらに、動きを身に付けるために、当該当学年の中での取扱時間にもこれまでの学習経験などを加味しながら計画を行う。はね跳びに焦点を当てていく場合には、マスターガイドにも示されているように伸膝台上前転の動きを十分に経験しておく必要があるため、単元を通してはねる動きの獲得に向けた学習計画を設定し、限られた時間での学びの充実を図り、動きを十分に味わうことができるようにする(資料5)。

ダイナミックボックス〜より大きく!より力強く〜						
〜動きを大きく!「できた」をふやそう!〜						
	1	2	3	4 (本時)	5	6
オリエンテーション	場づくり・準備運動					
	スキルアップタイム					
○場づくり	チャレンジタイム					
○学習の約束	チャレンジ					
○試しの運動	学びの共有					
○単元のゴールの確認	これまで学習してきた動きに挑戦する					

【資料5 首はね跳びを扱う際の指導計画】

(2) 「わかった」「できた」を生む場づくりの工夫

器械運動の学習において、子どもが主体的に運動に取り組み学びを深めていくためには「わかった」「できた」という成功体験の積み重ねが極めて重要である。これらの経験が学習への意欲を高め、自己効力感を育む原動力となる。そこで、例示されている技の習得のみを「できた」とするのではなく、先に述べたように「技の核となる動き」の獲得を「できた」と捉えて学習を進めていくこととしている。高さや広さ、柔らかさなどに工夫をした易しい場でも核となる動きに挑戦することができるようにし、それらの場での活動や取組を認めていくことで、必要以上に無理することなく「できた」を味わうことができるようにする（資料6）。また、多様な場での運動への取組が認められていることで、全員が同じ動き・課題について思考・判断・表現することも可能となり、他者と協働しながら動きについて学びを深めることにもつながっていく。



【資料6 誰もが運動に取り組むことができる場の設定】

(3) 子どもたちが追い求めたくなる「めあて」の設定

「子ども自らが学びとる体育科学学習」の実現に向けて、他者と協働しながら運動に粘り強く取り組むことも重要である。そのためには何を解決しなければいけないのかという課題が明確になっているかが大切である。

① 単元を通した学習課題の設定

単元前半部分で、子どもたちと一緒に単元終了時の目指す姿についてゴールを設定する。子どもたちが目指したい姿と教師の身に付けさせたい動きをすり合わせながら設定するようにし、相手意識のある成果物の作成や自分の成長記録を残すなどのゴールを設定する。ゴールが明確であることで毎時間の取組にも子どもたちが見通しをもって学習を進めることができる。その中で、「よりよい動きになるにはどうしたらいいか」など単元を通した学びの充実を図ることができる。

② 子どもをつまずきや困り感をもとにした毎時間のめあての設定

毎時間のめあては、前時までの振り返りや活動の中で生じた困り感をもとに設定する。単に「技ができるようになろう」というような漠然としためあてではなく、身に付けさせたい動きや体の部位の動かし方、運動を行うタイミングなど、



4 成果と課題 (○=成果 ▲課題 ●成果でもあり、課題でもある)

○器械運動マスターガイドの活用が進んだことで、子どもたち自身で動きの確認を行う姿が見られた。ただ意図もなく手本の動画を見るのではなく、「モデリング」を通して確認した共通言語を動きとして再確認する際に視聴するなど、自分たちの必要感をもとにした活用が見られた(資料8)。



【資料8 必要感をもったマスターガイドの活用】

●マスターガイドは児童の活動の一助になる部分もあるが、情報量が多くある程度使う経験を積んでおかなければならないという課題も見られた。学年に応じて動画のみ抽出しておくなどの工夫も必要である。

○学習内容を明確にしたことで、教師の指導事項も整理することにつながった。2年生の実践では、子どもの遊びの広がりに合わせて「こうもり振り」の動きに着目させる計画を立てた。全員が動きに挑戦できる場づくりの工夫とモデリングや共通言語の設定を行ったことで、単元終了時には当初動きに苦手意識をもっていた児童も含め全員が「逆さ感覚」「体を振る感覚」を獲得することにつながり(資料9)遊びの幅を広げることができた。

	できている	できていない
つばめができる	28→29	1→0
ふとん干しができる	23→28	6→1
こうもりができる	16→29	13→0

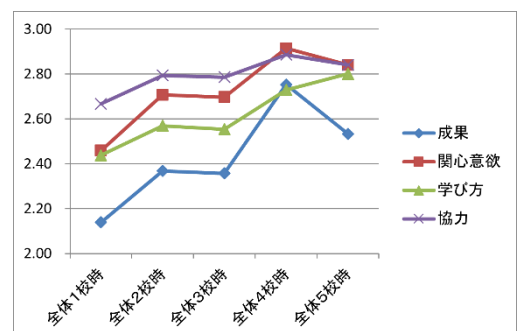
→逆さになることに難しさを感じていた児童が半数ほどいたが、学習を通して全員がこうもりをできるようになり、逆さ感覚を楽しんでいた。

【資料9 単元末の動きの獲得状況】

○低学年でのマスターガイドの活用は難しいため、応用紙やタブレットのクラスルーム機能を用いて、教師が写真や動画を掲示することで、子どもたちが具体的な動きの形をイメージすることができる学習の資料となっていた。さらに、チャレンジタイムでは掲示された資料を手掛かりにしながら、子どもたち自身がどの動きを試しながら遊ぶかを決めて活動しており、児童の関心や「やってみよう！」に応じた個別最適化された活動となっていた。

○5年生跳び箱運動の実践では、事前の運動技能の習得度合いをもとに、異質グループ・等質グループを柔軟に捉え、活動の中で流動的に作り変えていく学習展開に取り組んだ。異質グループの中では、既習の内容を確認する際に、友達の動きの良さを伝え合ったりできるようになるための具体的なアドバイスをしたりする協働的な児童の姿が見られた。また、困りや取り組みたいことに違いが生じることもあるため、多様に設定された場で似た課題意識をもつ子ども同士で等質グループを作り活動でき、よりよくなるうとする姿が見られた。

○5年生跳び箱運動実践の形成的授業評価では(資料10)、すべての項目において授業が進むにつれ伸びが見られる。特に「学び方」については、伸膝台上前転から首はね跳びへと学びとろうとする運動の対象が変化したにもかかわらず上昇が見られた。単元を通じた学習の積み重ねができたことが明らかになったといえる。



【資料10 形成的授業評価アンケート結果】

- 今回の実践では、教師の意図的なモデリングや肯定的なフィードバックを行ったことで、児童の学びを深めることにつながった。一方で、児童に考えさせる部分と指導する部分の棲み分けについて十分に検討しておくことが必要となるため、事前の計画段階の大切さも改めて明らかとなった。

## VI まとめ

熊本市小学校体育研究会では、これまでの研究をもとに特に器械運動領域を取り上げて子どもたちが「わかった」「できた」と自分の成長を実感できる授業づくりに取り組んできた。器械運動領域は授業をされる多くの先生方にとっても難しいと感じやすい領域である。それでも、子ども一人一人が学びのハンドルを握りながら主体的に活動し、友達と協働しながら学びを深めていけるように、これからもマスターガイドの活用を広め、教材・指導方法の研究などに係る先生方の負担感を少しでも軽減し、子どもたちと一緒に体育の授業を楽しめる環境を作っていきたい。そして、子どもたちも先生方も「体育が大好き！」な熊本市を目指してこれからも研究を積み重ねていきたい。

## VII 参考文献

- ・文部科学省（2019）『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 体育編』 東洋館出版
- ・文部科学省（2021）『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実』
- ・文部科学省（2011）『小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック』アイフィス
- ・岩田靖（2024）『体育の学習内容の探求』大修館書店
- ・白石豊・吉田貴史（2018）『器械運動完ペキ指導ガイド』明治図書